

# 朝をひらく

永田 円了  
真国寺住職



他の動物はブレないのに、人間だけがなぜブレるのか。自分の信念に従ってやればよいのに、なぜ他人の目を気にして行動してしまうのか。過去と未来のはざまでは後悔と不安の念にかられるのはどうしてなのか。

人類はおおよそ450万年前に二足歩行に進化し、家族をもち集団を築く。その後道具を使うようになり、200万年前には心をもつヒトに進化した。しかし困ったことが一つ起こった。進化の過程で人間だけに備わった心(意識)が、他の動物には起こりえないブレを引き起こしてしまったのである。

## なぜブレるのか

授かった意識のお陰で、人間は物事を客観的にみることができるといふ。コトバが発達し思考力も備わった。しかし意識はまた物事を相対的にみる世界を創造した。私とあなた、という主観と客観で象徴される二元性のもので人間に植え付けた。ここに生き方のブレを引き起こす元をつくってしまったのである。

考えてみよう。考え方、行動がブレるといふことは、それ以前に本来の軸となるものがある

## 「本来の軸」揺るがぬ

ということ。相対的・二元性以前の「ゾーン」があるということである。

私事ながら、極度の赤面症で悩んだ時期があった。小学生の後半から高校卒業まで、人前で話すとき、顔が真っ赤になり、まともに話すことができなかつた。

「円了、えんりよすんなよ」とよくからかわれた。あるとき、それは確か高校生の全校集会の場、なんと手を挙げて質問している自分がいた。あんなに人目を気にしていたのに、なぜそのような行動ができたのだろうか。

英国王ジョージ6世は吃音で悩んだ。言語聴覚士ローグとのやりとりの中、彼は叫んだ。私には伝えるべきことがある!

(I have a voice!) その後、彼はついに吃音を克服し、第2次世界大戦中に英国民を鼓舞するスピーチをすることができたというストーリーである(映画「英国王のスピーチ」)。

ちなみに、吃音者の多くは、命がかかるといふ戦場ではどることはなかつたという。また大学時代に吃音の先輩が2人いた。しかし不思議なことに英語でスピーチするときにはすらすらと話された。うち1人は著名な英語スピーチ大会で優勝もした。自分には世界に伝えるべきことがある、との気迫が「ゾーン」に導いたのである。

人間にはブレの元となる意識が誕生する以前の状態、頭で思考する前の世界があったはずである。

その「本来の軸」に入ったとき、人はブレる世界から解放されるのであろうか。